

## 小説同人誌評 31

今回は

『ココドコ』

細見和之

新型コロナ感染予防のためのワクチン接種が一定程度進んでいるが、それが決定的な解決策となるか、不透明な状態が続いている。現時点で私自身は、一回目のワクチン接種を待たせて二回目の接種を待っている状態。家族が濃厚接触者扱いになって…という声が私の周辺でも続いている。政府の無策を批判する意見も強いが、今度ばかりはどうしても判断が難しいと思う。こうやればいいと自信をもって主張するひとが私にはいささか信じがたい。地震列島で原発を稼働させ続けている愚かさとは、ちよつと次元が異なる。

さてそんなか、今回はだいたい同人誌が溜まってしまった。はじめて見る雑誌も何冊もあった。今回読んだなかでいちばん充実していたのは、『ココドコ②』。黒住純を代表としてコロナ禍のはじまる前だったと思うが、『ココドコ』のタイトルで雑誌が刊行された。その時点では第一号というよりは、一度限りの

試みということだったが、このたび、めでたくも第二号が出たのである。だから、固定したメンバーで定期的に刊行されてゆく通常の同人誌とはちよつと形態が異なる。ともあれこの第二号には力作が並んでいる。巻頭の水無月うらら「鉄棒の前で」は、高校の同級生との再会によって、自分の見た現実がすっかり異なっていることを知らされる物語。

ある夕方、公園で、「あたし」は「綾美」らしき人影を目にする。それは人違いだったのだが、そこから「あたし」は綾美と十五年振りに会いたいと思う。親しかったはずだが、ある時期から綾美が自分から離れていった。その理由がずっと気にかかっていたのだ。スマホにかるうじて残っていた電話番号をタップすると、綾美に繋がりが、綾美はすぐ近くをランニングしているところという。思わぬ再会のなかで、弦楽合奏部の顧問で大好きだった津和山がセクハラを繰り返していたことを「あたし」は知らされる。さらに、綾美がいま女性のパートナーと暮らしているらしいことも…。

大中小と三つの鉄棒が並ぶまえで二人の対話は続けられる。その鉄棒が人間の成長を示すシンボルの役割を果たして、その点も印象深い。

同誌掲載の、田中さるまる「人はいない」

は、四百字詰め換算二〇〇枚を超える作品。「僕」は他人を尾行するのを秘かな楽しみとしている。そのとき尾行した若い女性は、待ち合わせていた男とそのままラブホテルに入る。「僕」はその後もその女性の尾行を続け、彼女が相手を変えながら毎日のようにラブホテルに入ることを確認する。彼女はあるとき「僕」の存在に気づくのだが、「僕」がいつもヘッドホンをしていいることから、盗聴している」と誤解して、逆に用心棒役になるよう依頼してくる。性欲の強い彼女は「男狩り」と称して男を引っ掛け、セックスに満足できなかつた場合、金銭を要求し、相手とトラブルが生じることがあるからだ。実際、部屋に入ったとたんショックガンで男が彼女の頭を打ったときには、「僕」は彼女を窮地から救い出すことになる…。

この作品では、「僕」はかつて視線恐怖症に陥っていたことがあって、目に映るものすべてを文字に置き換えることでそれを克服した、という設定になっている。それを活かした密度の濃い文体が作品の随所に登場する。軽妙なストーリー展開と濃密な文体、それもこの作品の優れた特徴となっている。

同誌掲載の、内藤万博「6月6日午後6時〜エンバミニング2〜」も四百字詰め換算で一〇〇枚を超える作品。サブタイトルにあるように、遺体の修復に長けた呪術師、トリス

タンと伝説のガンマン、ウィットカーマンの絡むシリーズの第二弾である。

今回は、会社が衰退にいたったときには社長が自ら処刑されることによって会社の立て直しを図るといふ、奇妙な石油会社が舞台。「社葬」と呼ばれるその風習は何代も前に凍

結されていたのだが、現在の副社長が社長就任のために社葬の復活を目論み、そのためにトリスタンを雇う。一方、若い女性の現社長は社葬を免れるためにウィットカーマンを雇う。タイトルにあるのは、その社葬が実施されてきた日付と時刻。作品はその前日から当日にかけて展開してゆくのだが、それぞれ敵陣営に雇われたトリスタンとウィットカーマンは、知力を尽くして副社長の野望を打ち砕く…。

ミステリアスな筋書き、鮮やかなトリックの数々で、相変わらず作者の筆は好調。そもそも奇妙な「社葬」のアイデアなどどうしたら着想できるのかと感心してしまった。

同じく同誌掲載の、黒住純「ナガレの教室」も、四百字詰め換算一二〇枚を超える力作。

名門高校の受験の最中に、「俺」は幼なじみの同級生、天木春香のことを不意に思い起こす。国語の問題文に「天木はるか」という名前が出てきたのだ。天木はその前年の夏休み

モート授業を基本とする高校に進学する。そこで「俺」は「ナガレ」と自称している桃川と出会う。高校一年にしては社会的で手慣れた様子のナガレと「俺」は、天木をあいだに挟んで、緩やかな三角関係のようなものを織りなしてゆく…。

ナガレが株で儲けていて、それに釣られて「俺」も株に手を出して大損したりするところでは、その複雑な仕組みが巧みに語られている。難をいえば、読み手が「俺」に感情移入しきれないところだろうか。優柔不断かと思うと、いきなり大胆な振る舞いに出る。そこが思春期といえはそうなのだが。

同誌掲載の、三上弥栄「やさしい いえ2 ——トミナガ氏とシロ子さんの場合」は、タイトルにあるように、内藤作品と同様にシリーズの第二弾。

カオル子さんが大家をしている不思議な触井園荘というアパートを舞台に、今回はトミナガ氏とシロ子さんという二人の人物を軸に描かれている。触井園荘には世の中に適応するのが難しそうな人物たちが暮らしているのだが、トミナガ氏とシロ子さんもそう。大家のカオル子さんは優しい人物に見えて謎めいている。そもそもここでは、アパートの住人だったミオリさんが失踪したという事件がずっと背景にあつて、ミステリアスな雰囲気

だ。適応不能の人物を集め、彼らからじつは生命力を吸い上げ、若々しさを保っているようなカオル子さん…。

ユートピアがデイストピア(反ユートピア)と危うく接しているような磁場から、最後はトミナガ氏もシロ子さんも逃れようとしているようだ。

同誌巻末に掲載の、青木和「行き逢い月」は、幼い子どもが父親によって遺棄されるところからはじまる。「アツキビ」を主食とするその集落では、「乾き」による飢饉が続いていて、多くの子どもが遺棄されていた。その子の一番上の男の子を除いて兄と姉三人もすでに遺棄されていた。父親は鈍一つを渡して、森の奥でその子に薪を集めさせ、その隙に置き去りにしたのだった。

しかし、その子は鈍一つを武器にしたたかに生きのびて、次の場面では「テロ」と呼ばれて、新たな「親父」と暮らしている。しかもテロは、自分の影を分身として操れる「影人(かげひと)」という特別の能力の持ち主だった。「親父」は海で塩を採って売り歩くのを生業としていて、二人して放浪生活をするうちに、集団殺戮にあつた集落に行き着く。そこはテロの生まれた集落だった。そこで二人はかろうじて生きのびていた少女の「アカザ」と出会う。「親父」はテロに、自分が出てきた、いまでは桃源郷のように思われる「火の山の

鳥」のことを語る…。

これはいつ、どこの物語なのか、誰しもつきあたる疑問に、作者自身は同誌の「あとがき」でこう綴っている。「作者的には超古代の火星をイメージしています。」あつぱれなるかなと思つたが、そのことはこの雑誌全体にもあてはまる。

この同人誌評で一冊の雑誌に掲載されている作品をすべて紹介したのははじめてではないかと思う。読む側のバイオリズムも関係しているかもしれない。ちなみに、今回は最後に読んだのがこの『コドコ②』だった。

『文の鳥』第3号も充実していた。こちらにも全作きちんと紹介したいところだが、『コドコ』の調子でやると紙数が足りなくなるので、簡単に済ませておくことにする。こちらは今回、はじめのほうで目を通した。

同誌巻頭の、鳴海文成「絵日記」は、小学校五年生の二人の夏休みを、それぞれ絵日記のように描いている。同級生の女の子の「迷い犬」を探したり、自転車で彷徨ううちに遠い海辺に行き着いて帰れなくなったり、夏休みの気だるさがよく感じられる。

同誌掲載の、河内隆雨「弟切草」は、主人公が行きつけの居酒屋で渡された小説の原稿を読むという、作中作の構成を採っている。その作中作の部分が作品の大半が占めているのだが、その作中作の「私」の異界体験がじ

つによく書けているのだ。タイトルの「弟切草」については末尾に念入りに注まで付されているのだが、私は作品に対する関係にまで理解が及ばないままで。

同誌掲載の、風和「リターン」は、八十歳になって足腰が弱ってきている安治を視点人物として、三代にわたる家族の複雑な心理模様を、ゆつたりと丁寧に描いている。誰にも強い悪意はなく、むしろたがいに気遣い合つてさえいるのだが、些細なことでそのバランスが思わぬ形で崩れてゆく。会話の妙を感じさせてくれる作品でもある。

同誌掲載の、河内隆雨の二編目「記憶の住人(すみびと)」では、九十六歳で大往生を遂げた父親の残していた手紙が大事な役割を果たしている。九十歳で認知症にかかり出したころ、父親は何通かの手紙をしたためて封をしていたのだ。そこから父親の初恋の相手らしき人物が浮かびあがるのだが、古今集の和歌がここでは巧みに使われている。手紙とともに和歌が大事な記憶の装置であることをあらためて知らされる。

同誌巻末に掲載されている、的野ゆり「白は散り、花が舞う」では、夫には愛人がいてその相手とのあいだに子どもまで作っているのではないか、そういう疑念を妻が抱いているときに不意に夫が事故死する。いったい何が実際にあったのか。事態が徹底して妻の視

点で描かれているため、少々読み取りに苦労する箇所もあるが、タイトルの由来をなしている結末は爽やか。

『私人(しじん)』第104号の作品も充実している。私ははじめて見る雑誌だが、東京朝日カルチャーセンター「小説作法入門」講座の受講生からなる同人誌である。

同誌掲載の、梶原一義「蠅螂」は、ある市役所での談合事件を扱っている。

主人公、清彦は、テレビで談合事件のニュースを知り、自分と同じだと思う。清彦も談合を告発され、市役所を懲戒免職になり、離婚し、職探しの面接を受け続ける日々を過している。この作品では、談合がなぜ行われているかのように行なわれているかが綿密に描かれている。いわば談合の五W一Hが書き込まれているのだ。ここでは、談合に対する怒りというよりも、談合とその告発という構造そのものの持つ不条理さが浮き彫りにされている。この関係そのものがどういかならないものかと思わざるをえない。

同誌掲載の、杉崇志「人は右 車は左」は、一九六四年東京オリンピックの前後の東京を舞台に、優等生的な小学生「僕」と魅力的なアウトサイダーの同級生「イサム」との交流を描いている。

二人を結びつけたのは、家で小鳥を本格的に飼っているということと、犬を連れてリヤ

カーを引いている「バタ屋さん」に引き寄せられていたこと。どちらに關してもイサムのことを教わる。しかし、六年になって「僕」が進学教室の模擬試験を毎週受けるようになって、二人は次第に離れてゆく…。

いろんな要素が詰まった作品で、もつと立ち入って紹介したいところは多いが、一つだけ挙げておくと、「バタ屋さん」が学校の前で交通安全のために繰り返していた、タイトルと關わる「人は右、車は左、ネコはチュー」という言葉の、イサムによる謎解きが痛快。

『せる』第17号掲載の、津木林洋「今ここに在ること」は、コロナ禍でまさしく私たちが直面していることをまっすぐに描いている。冒頭、主人公の山辺宗吉（そうきち）がシミのついたズボンをクリーニングに持って行くところからはじまる。しきりに「ミネ子」との思い出が回想されるが、しばらくはその関係がよく分らない。読み進むと、ミネ子は宗吉の母親の世話をしてくれていた看護師で、母親が亡くなったあと、どちらも独身だった二人は週末だけどちらかの家で過ごす。二十年ほどそういう状態が続いて、ある日、ミネ子から「コロナに罹ったみたい」というLINEを最後に連絡が途絶えたのだった。やがてミネ子がコロナであっけなく亡く

なっていたことが分かる…。

作品の現在時はそれから半年後で、宗吉の回想のなかで、知人、まして宗吉とミネ子のような関係の相手がコロナ禍に見舞われたとき、どういふ事態に立ち至るかが克明に綴られている。そんななかで平常心を保つことの大切さがタイトルには込められているようだ。

『淡路島文学』第17号掲載の、三根一乗「最後の一葉」には、長い時間といくつものテーマが込められている。

冒頭は、主人公の小山内和雄が中学校に入學する昭和二十五年の場面から始まる。和雄は図書部に入って同級生の牧田と出会う。二人は、購入順になつていふ図書室の書籍のラベルを十進法の分類に張り替える作業に取り組む。図書部の顧問は久田先生で、ある本を小説と見なすか紀行文と見なすかといったやっかいな問題に直面すると、久田先生が深い造詣を背景に、適格にアドバイスを与えてくれる。

それから場面は現在時（平成二年秋）に変わり、久田の死の知らせが和雄に届く。葬儀に出席した一ヵ月後、和雄は久田の妻、シミコから、蔵書を和雄に譲るよう久田が遺言していたことを伝えられる。同時にシミコは久田の教員生活、それに先立つ満鉄時代の暮らし、引揚げといった久田と自分の生涯を、和雄に語る…。

いずれも緻密な内容で、特に満州からの引揚げの経緯など、貴重なエピソードに富んでいる。難を言えば、それぞれの場面をもうすこしゆつたりと描いてほしいということになる。少なくとも三作ぐらいで書かれるべき内容がぎつしりと詰まっている印象なのだ。

『半月 すおうおおしま』第10+1号掲載の、瀬戸みゆう「ジェットリア・バルガス通り」は、ブラジル、マナウスの日本人学校を舞台にした、四百字詰め換算一三〇枚を超える作品。

「わたし」は三年期限の派遣教師として日本人学校に赴任する夫とともに、小学校三年生の息子を連れてマナウスまでやって来る。車で空港に迎えにきた森林という教師はほぼ赤道直下にあるマナウスの暑さと不意に訪れるスクールの激しさを語ってことさら「わたし」を怖がらせる。

小学生と中学生を合わせて三十四人の生徒の小さな学校だが、やり繰り返したいへんである。そんななか同僚の桑水流（くわする）先生が肝炎を発症する。桑水流が回復するまで代わりに学校に出てきてほしい、と夫は「わたし」に告げる。元教員の「わたし」は五年前、家庭と仕事の両立に悩み、ノイローゼで教員をやめた身だった。「わたし」が立った四年と五年の複式学級では、案の定、子どもたちのざわつきがやまない…。

その日本人学校では学校の「実権」をめぐって秘かな争いがあり、それに立ち向かう夫とともに「わたし」があらためて音楽の教員として立ち直る方向が示唆されている。全篇をとおして、人間の信・不信という関係が、激しいスコールに象徴される異質な環境のなかで、みごとに浮き彫りにされている。

なお、『半月』は瀬戸みゆうと銚雅代との二人誌として刊行されたが、これからは銚の『半月 よどがわ』、瀬戸の『半月 すおうおおしま』という一人誌として発行されてゆくとのことである。

『文宴』第135号掲載の、藤原伸久「天の焰」は、一枚の絵をめぐる、四百字詰め換算二二〇枚を超えるロマネスクな物語。

主人公の慧心（けいしん）は小学校六年のとき本堂の屋根裏部屋で一枚の未完成の絵を見つける（この作品は一人称小説なのだが「私」「ぼく」といった主語は略されている）。そこには全裸の若い女性が描かれていた。描かれているのは「円香（まどか）」という女性で駄菓子屋の「正（まさ）やん」の妹、描いたのは祖父の兄、中沢八朗と分かる。八朗は戦死し、円香は結核で亡くなったと正やんから聞かされるのだが、中学生になって本格的に絵を描きはじめて慧心は、八朗の本に記された日付、位牌などから、戦死では辻褃が合わないことに気づく。正やんを問い詰めると事

実はこうだった。二人は愛し合う仲だったが、八朗戦死の知らせが届き、円香は別の男のもとに嫁いでいた。そこへ八朗が帰還してきた。戦死の知らせは誤報だったのだ。結局二人は心中を試み、八朗は亡くなり、円香は生き延びたがやがて彼女も亡くなった。その絵は心中の間に八朗が描いていたものだった。大学生になった慧心は、裸婦のデッサン会で、円香そっくりのモデル、葵彩（あおい）と出会う…。

物語はここからさらに展開してゆくのだが、一枚の絵をめぐる、複雑な人間心理が絡まった大きな物語世界だ。

『たまゆら』第120号掲載の、梅本修一郎「あれちのぎく」は、長い小説の出だしのようだ。「私」は大阪ミナミの麻雀店に勤務している。別れた妻とのあいだに娘がふたりあって、仕送りをしている。いまは新たな妻とのあいだに三人の子どもがいる身。妻は家でピアノを教えているが、それでも家計は火の車である。しかも、「私」はいつか小説で賞を取ることを妻に約束している。その点を妻は理解してくれているようだが、妻はやがて「霊明教」という宗教に入れあげはじめ、そのうち「子どもたちが殺される」と予言したり、絶叫したりするようになる。

さながら檀一雄の「火宅の人」のような世界だが、今回の掲載分では、妻が救急車で入

院させられるところで終わっている。さらに大きな作品として結実することを祈りたい。

『VIKING』第84号掲載の、大西咲子「風のたより十五 昭和四十五年」は、タイトルにあるとおり、一九七〇年の出来事を主人公、陶子の目を通して描いている。一九七〇年は大阪万博の年だが、三月末から四月初旬にかけてのよど号ハイジャック事件、十一月には市ヶ谷での三島由紀夫の割腹自殺があった。高校を出て大学浪人中だった陶子は、ジャワ更紗の工房を手伝いながら、世の中の動きを真正面から受けとめようとする。

この作品の最初のほうで「たきもとめいの伝説」から滝本明の詩「富士乱気流」が引かれているに出会ってびっくりした。二〇〇六年に亡くなった滝本明は、大阪文学学校の大先輩で、若いころの活躍ぶりはそれこそ「伝説的」だった。まさしくその一端にふれた気がした。

『白鴉』第32号では、大新健一郎「思いがけなく」を興味深く読んだ。主人公、遠藤孝之は不意に、大学生の娘がボランティア活動中に事故に遭ったと知らされる。奨学金支給の見返りとしてのボランティアだったが、じつはそれは、地雷撤去処理のための、極秘の訓練だった…。

相変わらず、近未来、あるいはむしろ現在そのものの問題を作者は鋭く捉えている。